資料No.－　2

第４回　文化会館整備検討委員会議事録（概要）

日時：平成２３年８月２９日（月）
１３時３０分
場所：にこふる　大会議室

〔出席者〕　高谷時彦委員　樋渡美智子委員　佐藤進委員　奥井厚委員　山田登委員
前田勝委員　菅原一浩委員　小林功委員　渡部巌委員　大久保紀子委員
柿崎泰裕委員　齋藤瑞穂委員　三浦譲委員　村山智昭委員

教育長　教育次長　社会教育課長　文化主幹　建築課長
芸術文化主査　芸術文化係長

１．開　　会（主幹）
２．あいさつ（委員長）
３．報告事項（主査）
利用者懇談会（青年団体）について、第一回専門委員会について資料No.１と２により報告、質疑応答

委　員　：専門委員の中に照明の方がいないようだ。現文化会館のメンテナンス職員の意見聴取及び照明の専門家の意見も必要だと思うが、今後の予定は。
主　査　：現会館職員には今後意見を聞く機会を設ける予定である。
委　員　：現会館の照明関係備品の不足についても具体的に聞いてほしい。
委　員　：新聞にも報道があったが、産業会館の件の現状はどうなっているのか。
主　幹　：市の方から正式に商工会議所に、ご協力をお願いしたいと申し入れをさせていただいた。現時点ではそのような状況である。

４．議　　事
主　査　：基本理念と施設機能について、資料No.２～６により説明
委員長　：今まではどちらかというと基本理念のほうから話し合いを進めていたが、逆のほうから話し合いをしてみたらどうかという前回の会議でのご発言もあったので、今日は施設の概要の方向性、ホールのコンセプト、ここから議論を進めたらどうかという提案があった。専門委員会の話し合いの資料等も活用しながらいろいろ議論を進めていただきたい。

佐藤総合計画：ホールの分類と特徴、ボリュームについて、資料№９により説明。

委　員　：鎌倉芸術館というところに行ったが、大変素敵な建物だった。開場を外で待つのではなくて、ホワイエで待つということは必要だと改めて思った。高齢化ということを考えれば、なおさらそういう配慮が必要だと思う。№９の参考資料では、搬入ゾーンが一番東側になっているが、搬入ルートはどこを想定しているのか。

佐藤総合計画：この段階では産業会館の敷地については考慮していないので、現在の会館の駐車場と致道館の間の通路を通って右折して切りかえして搬入することを想定している。

委　員　：資料中の席数は、通常の配置か、ちどり状など工夫された配置の席数か。

佐藤総合計画：資料№９の３頁目がちどり配置のホールである。この３つの図面は、今実際にある1000席、1200席、二階席での1200席のホールを現文化会館の敷地にはめているので、実際このぐらいのスペースになるということである。

委　員　：現会館の座席は狭いが、広くしても1000席で設計できるのか。

佐藤総合計画：現在の座席は、幅45ｃｍ、前後間隔85ｃｍで、現代の感覚からすると狭い。今回の資料は、それなりに新しいホールなので、今回の建て替えの際の参考にはなるのではないかと思うが。

委　員　：資料№９の２頁の図面で、産業会館側に出っ張っている部分は何か。

佐藤総合計画：出っ張った部分は、下手の側舞台である。

委　員　：これからの進め方の中で、佐藤総合計画さんとはどの段階まで仕事をするのか。

主　幹　：佐藤総合計画さんには、基本計画を策定する支援業務ということで、参考的な資料を作ってもらったり、専門的なところでアドバイスをいただいたりという形で支援していただく。来年度設計作業に入る予定であるが、設計業者については、来年度、今年策定する基本計画をもとに、改めて選定する予定である。

委員長　：ホールのコンセプトについてこの委員会ではどういうふうに決めていくか。

委　員　：コンセプトというとどういうホールを作るかという具体性のほうになっていくので、最初に基本理念と方針について意見を言いたいが。

委員長　：一体的にして発言していただいてもよい。

委　員　：理念という話になると非常に抽象的になるので、具体的な話し合いの中で

理念との関わりはどうなるのか、理念はこういうものを持たなければならないのではないかという話に回帰していけばいいのでは。

委員長　：理念は理念、ホールはホールというふうにまとめていくということで会議を進めているわけだが、具体的にコンセプトについて考えていって、理念、基本方針との整合性にお気づきの場合はそれもあわせて言っていただければ。

委　員　：前回の検討委員会の話や専門委員会の内容を加味してホールのコンセプトを考えると、多目的であり、けれども生音を大事にするという方向性がもっとも現実的ではないか。そういう内容で、演劇の要素もできるだけ加える。ホールの大きさについては、東北大会が開けるような1500くらいの席数がいいのではないかと思う。庄内という大きさで考えたときに、希望ホール、響ホールと同じ規模では、その役割を担いきれない。さまざまな意見のなかに、大きすぎると採算が取れないというものがあったが、私が調べた中では、さだまさし、平原綾香の全国ツアーも1500という席数で採算が取れるような出演料等になっているとお聞きした。メジャーアーティストを呼ぶのがたとえ年に数回であっても、来られるようなホールでなければと思う。狭いからできないということはあっても、大きいからできないということはない。いいホールを作ればお金がかかるが、ホールが大きいためのランニングコストの方がはるかにかかるというようなものではないだろう。それから、基本理念の中に芸術文化の拠点、交流する街づくりの拠点という話があるが、周辺施設とのコラボ、鶴岡らしい景観とのコラボを考えていく必要がある。

委員長　：多目的でも、生音を大事に。文化会館の席数を含めた大きさ。周辺施設との関連、三つの視点からのご意見だったが。

委　員　：基本方針の中で、順番が気になっている。まずは今の市民の活動を支えることに主眼をおいていただきたい。「育てる、支える、高める」というのが基本方針の中にあるが、一番大事にしてほしいのは今までやってきた活動を支えること。その次に高める、あるいは育てるというということではないか。基本方針も（1）～（3）がごちゃごちゃして同じことを何回も言っているので、順序性、比重を考えた上でもう少しすっきりさせたい。今の市民活動を支えるという点では多目的で生音というのは大賛成。ただし、席数については「支える」という観点からすると、あまり多いと、ランニ

ングコスト等の面で妥当なのか問題である。また施設の方向性の事務局案に環境や景観の問題があるが、演奏者が実際演奏するときに困っていること、発表するときの機能性を重視しないと支えるということにならない。アーティストを呼んでくる活動は年に数回しかないので、市民の活動を支えることを一番に考えてほしい。

委　員　：会館のコンセプトは、今までは多目的ホールみたいになるのだろうと思っていたが、ここに来て様々な資料を検討すると、「名を捨てて実をとる」「沈潜の風」というのが鶴岡の伝統的な気風だといわれているが、この際、限りなく質を取ることが必要なのではないか。今までの市民活動で、音楽活動が圧倒的に多い中で、それに答えるような音響のいい建物を目指すべきではないか。音楽、できるだけ音に特化して、そして演劇や他のものとの折り合いをどれだけつけるかという順位をつけるべきではないかと思う。それから客席については、今までの統計をみると、来場者 1000 人以内の催しが７割、８割であるので、今の立地から言っても 1000～1200 席ではないか。興行は、全国の文化施設を見ても圧倒的に赤字であり、ほとんど採算が取れていない。そうすると需要、シェアからしても興行に力を置くべきではないのではないか。それから市民が今までずっと育ててきた、音楽とか演劇のベースがある。誰のための会館を建てたのかと言われたときに、今まで利用団体の中では圧倒的に小中高、特に中学校高校が多く、将来成人してからの芸術文化にもつながる流れがあるので、そこを大事にした会館にするべきである。

委　員　：基本方針の（１）に「市民の活発な芸術文化活動を支援し」とあって、（３）に「地域文化を支える」とまたあるので、ごちゃごちゃしているように見えた。「支える　育てる　高める」とか簡単なまとめ方ができないか。「支える」ということを一番にして「市民活動を支える」、あるいは「市民の意識を支える」、「育てる」は未来、「高める」は未来と現在をつなぐものと考えて順番で行けば、「支える　高める　育てる」となり、このようにまとめるとコンセプトとしてはすっきりする。「支える」という視点で見ると、ホールの規模やどこを充実させるかというところが見えてくるのではないか。

委　員　：大中小ホールが必要だと思うが、非常に限られた敷地の中で、小ホールも中ホールもというのは大変なので、今ある中央公民館のホールを中ホールと位置づけ、200～250 人あるいは 150～200 人くらいの小ホールを作って、

リハーサル室を兼ねる使い方ができれば。

委　員　：専門委員会の牧さんと亀井さん、地元の若い層の文化活動をしている方、設計士の方と話し合いをする場があり参加した。そこでのホールの方向性は、専門委員会の言うとおり生音ということで結果的にはほぼ全員の方が賛成となった。生音をまずひとつのコンセプト、ホールの売りとして作っていけば、ある程度の演劇もクラシックや合唱も使えるホールになるのではないかと。席数に関しては、学校関係の方の意見を見ると1200席では足りない、1300～1500席が望ましいという話があり、これから鶴岡の発展が縮小していく方向になるのも悲しいのではないかと思って、現状維持もしくはプラスアルファということでその会ではまとまった。例えば通路に補助席みたいなものをつけるとか、オーケストラピットの部分を席として使えるような作りにするとかそういう方法もあると思う。

委　員　：席数については、多いにこしたことはないが、今まで経験した中で文化会館がいっぱいになるということはほとんどなかった。年間に２、３回のための1500席を確保するのか。これから財政的にも大変な時代に入るので、それを勘案して、合理的に平均は1200だ、1000だとなればそこで切って、補助椅子を使うというような検討が必要。中央公民館は400～500人でちょうどよくて、中ホールとしての使用には大変手ごろ。ただ、中央公民館は昭和５３年にできたと思うが、そろそろ老朽化してきて修繕しながら使用している状態であるし、駐車場が少ない。中央公民館を中ホールとして考えるとまた別の問題が発生してくる。

委　員　：先ほど委員長が整理してくれたように、３つぐらいにポイントを決めて議論していると思うが、最初にホールのタイプ、何の演目に主体を合わせるかということについては、みなさんの意見を聞いていると、コンサート系主体と理解した。生音を主体にしたホールでかつ演劇も使うというと、同じ生音でも楽器と人の声では全然違うため、可変装置を前提にするしかないと感じた。最新技術の可変装置でいろいろと対応できるそうだが、ある程度の投資と維持費がかかるホールになるという感じがした。ただ今までやってきた活動を中心にするのであれば、生音ははずせないという気もする。二つ目のポイントは席数のことだと思うが、敷地にかなり制約があり、狭いので、現実的に1000席くらいが限度だと思う。まわりの環境を考えると、あまり大きくはできない。環境のことだけ考えれば、劇場型のプロセ

ニアムでフライタワーが上にあるタイプではなく、コンサート系のホールにしたほうが全体の突出部分が少なくなるので、周りとの関係がいいという感じはある。三番目が付帯施設とか他のホールとの関係という論点だが、この敷地の中に何が入るか図面を見ると、バックスペース、たまりになるスペースが少ない。これから市民の活動を支えるホールとすると、大ホール単発で何も他に余裕がないというのはどうなのか、そういう視点での議論もしてもらえないか。「人を育てる町鶴岡」という意味でも大事なスペースになるのではないか。

委　員　：席数についてはできれば1200席くらいはあったほうがいいが、文化会館が1000埋まることはまれなことなので、1000を基本にして考え、あとは客席のゆとりと演者の動線、環境の確保を主眼にすべき。「支える」ために、演奏者のためのリハーサル室、ホールとの動線、そういうものも含めて充実させたときに、座席数がいくらまで可能なのかという面積的な問題があるが、何を重視するかということから考えたほうがよい。

委　員　：今の話と関連して、図面をみると、支える活動と晴れの舞台の活動が分かれるぐらいにしか取れない感じがした。エントランスにはできればみんなで集まれる場所、パブリックなスペースのつながりを考えたほうがいいし、特に内川という市民にとっての資産があるが、それとエントランスをつなげようとしてもいろいろ大変な敷地・条件である。客席を減らすというのはあまりよくないとは思うが、ちょっと少なくするとうまい動線が出てくるとか、そこを見出す作業がいるのでは。

委　員　：敷地面積から言ってどうしても1500入らないのであればしかたがないが、仮にこの建物をより致道館側に寄せて、川のほうに道路を作っていくようにすれば、もうちょっと広がるのではないか。図面を見た限りではまだ疑問がある。また、興行だけでなく、学校関係者の中にも1500席が望ましいという意見がある。1000席では東北大会もできない、青年会議所が全国大会も開けない、そういう要素になってはいけない。それが仮に補助席であっても、そういう観点も残しておきたい。もちろんこのスペースでは完璧に無理、ということならしかたがないが、優先すべきはやはり庄内の人たちの考えだと思う。

委　員　：さまざまな意見を見ると大きいに越したことはないが、コストの面から、中を仕切るようにしてはどうかという意見があった。実際仕切ることが設

計上可能なのかどうか、お聞きしたい。二点目は、多目的ホールということでご説明があった中で、最近の多目的ホールは多目的でありながら、主演目を絞り込むことが多いとのことだったが、ここでいう主演目という意味は、どういうことをさしているのか。

委　員　：関連して、席数の問題で、補助席200とか300とか設ける場合に、防災上の問題はどうなるのか、どんな設け方をするのか、お聞きしたい。

佐藤総合計画：ホールを区切る例については、実際当社も1500のホールで、一階と二階、省エネや使用目的の問題で実施した例がある。補助席については、現状は一階の固定席の中で、簡単なバスの補助席みたいにするのはたぶん認められない。他ホールの例を見ると、二階席で、可動のもので、避難ルートもそのスペースがある補助席で、それは防災の面も含めて、消防なりが了解した上でのものと理解をしている。多目的ホールの主ということについては、一般的には「音楽を主とした」とか「音を主とする」というのが多い。

委　員　：ワンフロアで仕切ることは可能か。

佐藤総合計画：ワンフロアで仕切るのは、避難の問題などで非常に問題がある。

委　員　：二階席を区切ったホールはどちらのホールか。

佐藤総合計画：岩手県の奥州市、ゼットホールである。利用状況をうかがうと、実際の利用回数は少なかった。

委　員　：本当に必要なものを考えていった最後に座席数が出てくるかもしれない。それがホールのコンセプトに反映するのではないか。

委　員　：座席数についてはできれば多いほうがいいと考えるが、ランニングコストの問題も重要。実際大小によってランニングコストにどの程度の差異がでてくるのか、次回までに資料を準備してほしい。

委　員　：合唱、吹奏楽の東北大会は6年に一度、各県持ち回りで、ほとんどが県庁所在地でやっている。6年に一度の大会が1500あればやってくる。全国大会は2000あればやってくる。吹奏楽の県大会は、山形では県民会館に固定方式。合唱の県大会は庄内と山形と持ち回りで、800あれば県大会が行えるという状況。

委　員　：ここで想定された三つのプランの中で、だいたい面積がどれくらいまでで、単価は今で言えば、標準的な相場からしてどれくらいか。

佐藤総合計画：今の質問についてはデータ確認する時間がいただきたい。工事費は落

札価格が公表されているということだと思うが、設計者も市も予算は設計価格で組み、落札はその業者のその時代時代の、環境と状況によって競争性が激しい場合が現実におこっているため、非常にコストの比較は難しいと感じている。今日三例出したが、今回はホールの部分だけを落とし込んだわけで、実はホール以外にも中ホール小ホール、練習室、会議室等の諸室があり、調べれば㎡当りの単価は出るし、当時はこうだったという報告はできるが、これが現在ではこうだというところまでの比較は難しい。

委　員　：座席も広いほうがいい、楽屋も駐車場もリハーサル室も、広いにこしたことはないが、予算のこともあるし、どこまでなら妥協できる範囲か知りたいのでお尋ねした。

委員長　：いろんな発言があったので、次回までに事務局に資料として作ってもらって、それをもとにしてまとめていったらどうか。基本理念に関わること、整備の基本方針、目指す施設の方向性、完全ではないけれども、全体から見ると整理されているのではないかと思うので、気がついたことがあれば出していただきたい。

委　員　：基本理念、あまりにも文章が長すぎる。もっと簡潔明瞭に、伝統文化を尊重する鶴岡市と、こうしていきたいんだということだけで三行くらいにまとめられるのではないかと思う。

主　幹　：基本理念を三行にまとめるのは難しいと思う。基本理念を網羅するようなスローガンというかキャッチコピーを、文章の前に整理したいと思っている。次回までにこれまでの意見を踏まえながら提案させていただきたいがいかがか。

委　員　：理念というのは「こうしたい」というもの。鶴岡市が伝統文化を大事にするから、文化会館を作るには、結局伝統ある文化を生かしていけるような会館にするということだけで十分なのではないか。

委員長　：説明的な部分を思い切って省いて、「支える、育てる、高める文化施設」というふうに短くしてはどうかというご意見のようだが。

委　員　：おっしゃるとおりだと思う。基本方針というのが基本理念を分割して三つにわけたような形になっているので。

委　員　：理念というのは包括的な言葉でまとまる場合が多い。それをより具体的にするのが方針。

委員長　：方針はある程度まとまっているのではないか。

委　員　：結局のところ、一体的なホール機能の問題を抜きにしては決められないのでは。1500席くらいで、興行、内外の優れた芸術鑑賞の機会を与えようとすると、この敷地ではホワイエとか裏に行く動線とか、そういうものがつけられないと思う。多様な文化活動を支えるのであればそれなりの、鑑賞機会を与えたいのであればそれなりの作り方が必要であり、どちらを優先するのか議論しないと決められない。敷地が狭いのでどちらかを選択せざるを得ないと思う。

委員長　：基本方針がこのままでいいかどうかはもう少し検討する。目指す方向性については。

委　員　：施設機能のほうには練習や交流のことが書いてあるが、目指す方向性の中には、利用者の中でも、発表者の部分の機能の充実と、お客さんの快適な部分の住み分けがはっきりしていない。発表者に対する配慮が足りないので、発表者が現在困っている部分に対する方向性もほしい。（1）にも（2）にも「対応」とあるので、「支える」を（2）にすればいいのでは。

委員長　：（1）は対応する、（2）は支える、と言葉を変えてはどうかということだが。

委　員　：目指す施設の方向性で、アンケートの中にもあったが、座席数だとか周辺施設との連携とか考えると、地下というのを利用するのもひとつの有効な手と考えられるが、資金の面や、川の脇ということで問題があるのか。

主　幹　：市としては今のところ、コストや工期のこと、川のことなど様々な面でリスクがあるので、できるだけ地下の工事は避けたい。ホールの奈落だとか、どうしても地下工事が出てくるところは避けられないが。

委　員　：目指す施設の方向性の（3）と（4）は、健常者の方も障害者の方も誰でも利用しやすい施設ということで、わざわざ分けなくてもいいのでは。

主　査　：（3）と（4）については、現在は障害者に対応しきれていない部分があるため、あえて分けて表現した。

委　員　：今日の話し合いの中で方向性が少し進んだとしたら、「生音」を中心とした、あるいは様々な芸術分野に対応できるホールというのが一番のコンセプトに来るのかもしれない。

委員長　：公共施設として、障害者に対する配慮がわかるような言葉もどこかに入れたほうがいいのではないかということで、ここに入っているということだと思う。

施設の中で特徴的なこととして、音を主にしてホールを作るということだが、それ専用でなくて、多目的な面についても配慮する施設、そういう文言が入ったほうがいいかどうか。

委　員　：方向性は十分わかっているが、今日結論を出さなくてもいいのでは。

委員長　：次のときにはっきり決まるようにしたい。事務局より、議事録、次回日程等について説明を。

主　査　：前回の議事録を掲載してよろしいか。

委員一同：了承

主　査　：次回の日程、10月4日火曜日、午後1時30分でよろしいか。

委員一同：了承

主　査　：前回指摘があったスケジュールについて、当初7回と予定していたが、現時点で一回増やし、8回にさせていただきたい。（スケジュール案により説明）

委員一同：了承

委員長　：そのほかなければ、議事を終了する。

5．閉　会

教育長挨拶